

# 南コーカサス地方の新石器時代

## —アゼルバイジャン発掘調査(2008~2019年)—

西秋 良宏 東京大学総合研究博物館教授・館長  
 ファルハド・キリエフ 国立科学アカデミー考古学民族学研究所博物館長  
 アザド・ザイナロフ 国立科学アカデミー考古学民族学研究所研究員

### The Neolithisation of the Southern Caucasus: The Azerbaijan-Japan Joint Excavations in 2008-2019

NISHIAKI, Yoshihiro Director/Professor, The University Museum, The University of Tokyo, Japan  
 GULIYEV, Farhad Director, Museum of IAE, NAS, Azerbaijan  
 ZAYNALOV, Azad Researcher, IAE, NAS, Azerbaijan

#### 1. はじめに

西アジアは世界で最初に本格的食料生産経済が始まった地域である。したがって、食料生産の起源や発展、さらには、それが社会をどう変えたのか、という人類史を理解する上で欠かせない問いを調べる無二の舞台であり続けている。筆者(西秋)も、その研究に考古学的観点から貢献すべくシリアを中心にした西アジアで新石器時代遺跡の調査、研究を続けてきたところであるが、2008年からは、その北隣、南コーカサス地方にあるアゼルバイジャンで類似の研究を開始した。シリアでの研究を終了したわけではなく、当初は、両国で発掘調査を平行してすすめていた。しかしながら、2011年春のシリア政情不安勃発以降は、アゼルバイジャンが主たるフィールドになりつつある。

ところが、2020年は特別な年になってしまった。コロナ禍に加えて、9月にはアゼルバイジャンと隣国アルメニアとの戦争が始まり、現地調査は全く不可能であった。そのため、これまでの調査成果のとりまとめに専念することとなった。これを機に、過去12年間にどんな成果があがったのかについて、簡単に整理してみたい。

#### 2. アゼルバイジャンにおける新石器時代遺跡調査 2008~2019

アゼルバイジャンが位置する南コーカサスはシリアからみてもたかだか数百キロ、トルコに隣接する地域であるから、まさに西アジアのお隣にある。ところが、新石器時代研究は全く遅れていた。ソビエト時代の孤

立と、その後の政情不安が主たる理由である。この状況が一気に改善したのが2000年代後半以降の暫定的政情安定、西側研究者の参画であり、筆者らの研究もその一部を構成している。これまでに調査した三つの遺跡の成果について整理する(図1)。

##### (1) ギョイテベ遺跡 2008~2013

最初に調査地としたのは、アゼルバイジャン西部、クラ川中流域にあるギョイテベ遺跡である。同国新石器時代研究の先達、I. ナリマノフが1960年代に発見した遺跡で、直径140m、高さ9mほどの円形遺丘である。シリアの新石器時代遺跡と比べればたいへん小さいが、アゼルバイジャンでは最大級の新石器時代集落と目される。発掘してみたところ、多くの日干し煉瓦造りの円形建物群が全部で14の建築層にまたがって重なっていたさまが明らかになった。加えて、五つ前後の円形建物が袖壁でつながり、直径6~7mで中庭を囲むリング状の遺構群を構成していることもわかった(図2)。そのような建築単位がさらに袖壁でつながり、広範に展開する大型集落だったのである。個々の円形建物は居住用であったり倉庫であったり機能分化していたらしい。中庭は火処をふくむ日常活動の場であったとみられる。リング状の遺構単位は個々の世帯を表しているのだろう。

見つかった遺物は土器があったり磨製石器があったり、完全な新石器時代資料であった。栽培種のコムギ、オオムギが見つかり、かつ、ヤギ、ヒツジなどの家畜動物骨もたくさん見つかった。すなわち、相当程度に確立された新石器時代集落であったと考えられる。全部で、14層に区分できるものの、放射性炭素年代測



図1 関係遺跡の位置



図2 ギョイテペ遺跡の建築



図3 ハッジ・エラムハンル遺跡の建築

定の結果によれば、200年ほど(前5650~6460年)の比較的短期間に残された集落であったこともわかった。

## (2) ハッジ・エラムハンル遺跡 2012~2015

ギョイテペが完成された農耕村落であったのなら、さらに古い農耕遺跡がないのかどうか。それを探すべく2010年から周囲の遺跡踏査を続けていたところ見つかったのが、ハッジ・エラムハンル遺跡である。ギョイテペの1kmほど北西にある小さなテペで、直径は70m、高さは1.5mほどしかない。地表に土器がほとんど見られないことから古手の遺跡であることが示唆された。

そこで、2012年から15年まで発掘調査をおこなったところ、予想通り、ギョイテペより古い新石器時代遺跡であったことがわかった。全部で四つの建築層が認められ、それらの年代は前5950~5800年に位置づ

けられた。穀物栽培や家畜飼育の証拠は最下層ですすでにそろっていた。物質文化という点で興味深いのは、ギョイテペとは建物の形状が異なっていたことである。円形の日干し煉瓦建築であることは変わらないが、ハッジ・エラムハンル遺跡では、大小二つの円形構築物が接合されて一つの建物(家屋)を構成していた(図3)。したがって、雪ダルマのような平面形を示す。また、土器の出土が極めて少なかったことも特筆すべきである。前6千年紀の初めと言えば、西アジアでは美しい彩文土器で知られるハラフ文化が開花した頃であるから、西アジアから伝来した新石器文化に土器の製作・使用が伴っていなかったことは考えがたい。南コーカサスの人々は食料生産はすみやかに受け入れたものの、土器文化の受け入れには急ではなかったとみられる。

### (3) ダムジリ洞窟 2016～2019

ハッジ・エラムハンル遺跡の発見によって、南コーカサスで知られている最古の段階の新石器時代集落を定義することが出来た。次に調べるべきは、それと、以前から現地に展開していた狩猟採集社会との関係である。すなわち、中石器時代遺跡との比較が不可欠である。そのため、2015年に中石器時代遺跡の探索をおこなったところ、上記2遺跡から40kmほど南西にあるアベイ山麓に位置するダムジリ洞窟が有望との結論にいたった。幅は約70m、奥行きは最大7mほどの岩陰である。石灰岩山塊の東麓、標高約560mの地点にある。

2016年以降の発掘によって、実際、新石器時代文化到来直前にあたる前8千年紀の中石器時代堆積があることが明らかになった(図4)。さらには、その上層に前7千年紀のハッジ・エラムハンル遺跡やギョイテペ遺跡と同じ時代の新石器時代堆積が埋もれていることもわかった。すなわち、私たちが、南コーカサス地方への農耕文化導入過程を調べる上で最重要だと考える時期の全ての考古学的証拠が得られる希少な遺跡であったというわけである。

ダムジリ洞窟の中石器時代層の出土物は、予想通り、狩猟採集民経済を示していた。野生ヒツジの狩猟やエノキなど木の実を食料とした経済である。一方、新石器時代層からはムギ類は見つからなかったが家畜動物骨が見つかったから、食料生産をおこなっていた集団の居住によるものであったことは間違いない。放射性炭素年代によれば中石器時代層は前6500～6000年、新石器時代層は前6000～5300年とみなされる。

## 3. おわりに

これまでの調査成果によれば、南コーカサスの新石器化について二つのことが指摘できる。第一は、中石器時代から新石器時代への転換がきわめて短期間におこったということである。「移行期間」や農耕民と狩猟採集民が共存した時期があったとは思われるが、我々の調査遺跡の放射性炭素年代でみるとほとんど同定できない。第二は、新石器経済が導入されて以降も社会、生業には変化があったことである。ハッジ・エラムハンルの時期とギョイテペの時期を比べれば、建物が雪ダルマ式からリング式に変化しているし、さらには土器の製作利用が後者において本格化する。詳しくは述べないが栽培穀物や家畜飼育においても変化があったことがわかっている。このように細かな実デー



図4 ダムジリ洞窟の発掘風景

タが南コーカサス地方の新石器化研究において得られたのは初めてのことである。

2008年以降の12年間のアゼルバイジャン調査成果は実に大きなものだったと自負している。コロナによる巣ごもり期間中に、発掘した遺跡の一つ、ギョイテペの研究成果を書籍にまとめることができたのはさいわいである。とは言え、さらなる調査が不要というわけではない。次年度、状況が改善されれば、ダムジリ洞窟の調査を継続したいと考えている。設定したトレンチに未掘部分が残っているからである。また、ダムジリ洞窟はアゼルバイジャン西部を代表する観光地に位置しているから、現地当局と協力して史跡整備することも期待されている。首尾よく計画がすすむことを望むものである。

今回のとりまとめは文部科学省科学研究費補助金新学術領域『パレオアジア』研究計画研究「アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築」(課題番号16H06408、研究代表者：西秋良宏)の成果を含む。

#### ■参考文献(昨年に追加)

- ・ Nishiaki, Y. and F. Guliyev 2020 *Göytepe — The Neolithic Excavations in the Middle Kura Valley, Azerbaijan*. Oxford: Archaeopress.
- ・ Nishiaki, Y. 2021 Hunter-gatherers and farmers in the Mesolithic-Neolithic contact period of the Southern Caucasus. In: *Cultural Continuity of Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to Present*, edited by K. Ikeya and Y. Nishiaki, 109-123. Osaka, National Museum of Ethnology.
- ・ 西秋良宏 2020「アゼルバイジャン考古学事情」『考古学ジャーナル』737 24-27頁。
- ・ 西秋良宏・A. ザイナロフ・M. マンスロフ・下釜和也・赤司千恵・廣瀬允人・池山史華・ト半馨 2020「南コーカサス地方の新石器時代—アゼルバイジャン第12次発掘調査(2019年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』40-43頁 日本西アジア考古学会。